

都道府県別賞一等

タスキを受け継ぎ走り続ける

和歌山県 有田市立有和中学校 二年生

堀江 萌朱

「大学に入学するまでにあと五年だね。」という母の口癖を毎年のように聞かされている。その意味を最近知ることになった。

今年、一番上の姉が高校二年生になり、こども保険の年払いが最後の年になったという会話を家族の中で話することになった。こども保険ってなんだろう？という疑問をもった。私が生まれて出生届を出してすぐから、保険会社のこども保険に加入して、大学資金を少しずつ貯金してくれていたのだ。生まれてすぐに大学入学のことまで考えてくれていたことに胸が熱くなった。大学に行くかどうかともわからない状況で貯金をしてくれていたことはうれしかった。また、なぜそのようなことをしていたかも聞いたら、「もし大学に進学したいと言ったときにお金がないから進学を諦めることはしてほしくないから。」と言っていた。もし、大学に行かないなら私の結婚資金にでもしてくれるようだった。

私は四姉妹なので、四人とも平等に好きな進路をしつかり目指せるように考えてくれていた。しかも私のために入ってくれていたこども保険は単なる貯蓄だけでなく、入院したら保険金を受け取れるものであったと聞いた。私は、二歳までに三回入院をしている。その間母も仕事を休んで付き添いをしないとけないし、色んな準備でお金が必要だったので、「保険金が下りたのでその時、お金の心配をせずに安心して看病をすることができた。」と言っていた。

「もし、こども保険に入っていないと大学入学までに二百万ずつコツコツと貯める自信がないから、こども保険に入ってよかった。」と母は言っていた。今はニーサとかあるけれど、母は、「もし今から新しく子供ができてこども保険に入る。」と言っていた。母が「萌朱の可能性は無限大だからお金を心配せずに自分のしたいことをあと五年間でみつけてね。」と言っていた。とてもうれしい気持ちになった。

正直母の話を聞くまでは、保険について全然知らない状態であった。しかし、もうすでに三回も保険金をもらったことがあり、母のお金の心配を取り除いてくれた。看病に専念させてくれ安心できる材料であったということだ。もう一つは、これから受けるこども保険の部分である。私の人生をセーブすることなく希望に満ちた生活を応援してくれる材料になると私は思っている。こども保険が終わっても生命保険という形で少しでも残して万が一に備えたい。困った時にお金に余裕があるのとならないのでは全然違うと思う。保険に入っているだけ

## 第63回中学生作文コンクール

で心にゆとりをもって過ごせたら幸せだと思う。

自分の子供にも母がしてくれた通り無限の可能性を与えてあげられる母親になりたい。また、私も人間なのでいつかは逝く。家族とともに歩む未来を考えながら自分がなくなったら後も今と変わらない生活を送れるように努めたい。私はすでに十三年という時を生命保険とともに歩んできている。人生のパートナーになっっているかもしれない。全てはお金とか生命保険とか言っているわけではなく、絶対的な安心感を買うということである。そう思えたら全力で人生を楽しむような気がする。私の今までの人生のほんのわずかではあるが、母が○歳だった私に渡してくれたタスキをしっかりと握りしめてこれからもしっかりと生きていたいと思う。